



【責任感】

土木の責任・「利他」の土木へ

自問自答…土木の責任

政府、電力事業者、自治体などから技術アドバイスを求められるが、構造物の破壊や機能不全に陥らぬよう、その時点でベストと思える助言をしている。その土木構造物に問題が生じれば「自分の責任」になるか

らである。一方、予算や工期などという問題が、責任をあやふやなものにしてしまうことがある。予算に見合うように事業を変え、本来の目的がやや揺らいだプロジェクトになり、工期を守るべく無理に事業を進めたりすることがある。

あるのか。発注する事業者も、自らの身体を手術してもらおうような気持ちで、丁寧な建設事業実施をお願いしているであろうか。こういったことを、土木学会は自問自答する時期にきているのではないだろうか。

された。これを契機に、参考文献^②を読み、先輩教授と当該学生との議論から、土木学の責任は「利他」であることに気付いた。「利他」とは、利己の対義語で「自分のことよりも他人の幸福を願うこと」という意味である。土木学の究極の責任は、まさに「利他」と考える。図1に参考文献^②に示された生物の世界における利己・利他の概念に、著者なりの土木の世界、学術の世界の利己・利他を追記した。



小峯 秀雄
KOMINE Hideo
正会員
早稲田大学 理工学術院 教授

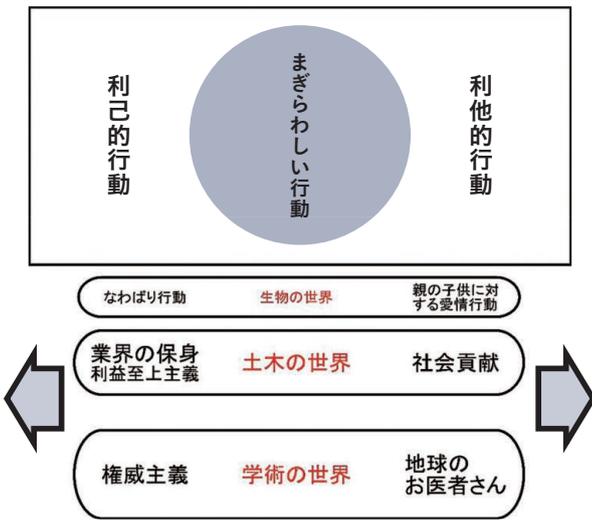


図1 土木の世界、学術の世界における利己・利他の概念

著者は、土木技術者を地球のお医者さん^①と例えている。実際の医者が患者に施術をするとき、価格の安い手術を勧めたり、限定された時間でやみくもに手術をしたりするだろうか。テレビドラマで、そういう医者は悪徳として描かれる。同様に土木業界を考えたとき、価格の安い工法、やみくもに工期を守る工事は「責任」という観点で、本当に適切で

教育の点でも自問自答してみる。医学では大学教授であっても、手術の執刀や患者の内診に第一線で活躍している。これに基づき、著者も現場での課題解決に応じ、毎年の年次学術講演会で、自らの最新の研究成果を口頭発表している。このような姿勢を次世代が目にする機会を創ることとは、土木教育に従事する者の責任であると思う。

「利他」の土木へ

最後に、学生に気付かされたことを記す。ある学生から「土木構造物は、自然に還るべきである」と意見

参考文献^②では、生物学における人類は、利己的な「競争」よりも利他的な「共生」を大切にする社会の構築を模索すべきとしている。同様に土木学で考えれば、一業界の利己的な競争ではなく、社会の幸福に資する「利他」と自然との「共生」を踏まえた土木学の展開を模索すべきである。

参考文献

- (1) 小峯秀雄「医学との比較に基づく土木の未来、電力土木」第413号、3～6頁、2021年
- (2) 鈴木正彦、末光隆志「利他」の生物学、適者生存を超える進化のドラマ、中公新書、2023年
- (3) 安原一哉「連携、共創そして共生…あらたな地域社会づくり、LRRRI会員&役員だより、令和6年7月号